



こころのケア特集



つなぐちゃんベクトル

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会社内誌 臨時増刊 360 号 2011.5.4 発行 社会政策研究所

PTSD治療の専門家、東北で20人足らず 被災患者数千人？

読売新聞 2011年5月2日

東日本大震災の影響で、PTSD（心的外傷後ストレス障害）患者の増加が懸念されているが、治療効果が高いとされる心理療法の専門家は、東北地方で20人未満にとどまることが読売新聞の取材で分かった。

専門家は「患者を救えない」と危機感を強めている。

PTSDは、恐怖場面が繰り返しよみがえる状態などが長く続く。死の恐怖に直面した人の5～10%が発症するとされる。被災者や、遺体捜索などを行った救援者も発症の恐れがある。防衛医大精神科の重村淳講師は「今回は被災者と救援者の数が膨大。患者が数千人に上る恐れがある」とみる。

治療では抗うつ薬などが使われるが、効果があるのは患者の2～4割程度とされる。国際的に有効性が確認されているのが、心理療法の「暴露療法」。医師らが患者の恐怖体験を引き出し、安心感を与えながら恐怖心の克服に導く。武蔵野大学人間関係学部の小西聖子教授によると、経験豊富な治療者が行くと、3～4か月で7割の患者の症状が大きく改善するが、こうした治療者は日本中で20人未満で東北地方にはいない。

「EMDR」という心理療法も欧米で普及している。患者は、治療者が眼前で左右に振る指の動きを目で追いながら、体験を思い出す。恐怖体験の記憶の処理が促されるという。しかし、兵庫教育大学発達心理臨床研究センターの市井雅哉教授は「東北地方で行える人は20人足らず」と説明する。

これらの心理療法は日本では適切な診療報酬がつかず、普及が遅れている。小西教授は「現状では、被災者に接する機会が多い保健師がPTSDの知識を学び、症状悪化を防ぐ対応をしてもらうしかない」と話す。

遺体を拭った警察学校生 「仕事の重さ知った」 使命感胸に捜索続ける

産経新聞 2011年5月1日



がれきの中で捜索活動に当たる竹谷信宏巡査＝宮城県岩沼市（中村昌史撮影）

警察官の卵として初めての仕事は、収容された遺体をきれいに拭くことだった。東日本大震災で甚大な被害が出た宮城県。人手が足りない県警は警察学校生を現場に駆り出した。髪の毛を拭いた女の子の遺体、母親から差し出された小さな男の子…。「警察官の仕事の重さを知った」。厳しい現場を経た“卵”は今、使命感を胸に、警察官として現場で不明者の捜索やパトロールを続けている。

震災から3日後の3月14日夕方、竹谷信宏さん（25）＝現巡査＝を含む41人の宮城県警察学校生に教官から思いもよらぬ命令が下された。「明日から検視の仕事を手伝ってもらう」。学校生たちはそれまで、宮城県名取市の高台にある警察学校に避難してきた人

の世話などに当たっていた。

■覚悟していたが

竹谷さんは「警察官になった以上、遺体と接することは覚悟していたが、まさかこんなに早くとは…。『遺体はどんな状態なんだろうか』『苦しそうな表情をしているのだろうか』。前日の夜は恐怖心で眠れなかった」と話す。

翌日、収容所でいきなり言葉を失った。最初に対峙（たいじ）した遺体はまだ5～6歳の女の子。悲しみを通り越してしまうほどの衝撃を受けた。厳しい寒さの中、黙々と水でぬらしたタオルで体と髪に付いた泥を拭った。竹谷さんとペアを組んだ警察学校生の女性は涙をこぼしていた。

検視の手伝いは約半月続き、70～80人の遺体をきれいにした。

中でも竹谷さんのまぶたに焼き付いている光景がある。仕事中に声をかけられ振り向くと、放心状態の女性がたたずんでいた。両腕に3～4歳くらいの男の子の遺体を抱えていた。「息子なんです。きれいにしていただけませんか」

やり場のない悔しさを感じながら、少しでもきれいにしてあげようと丁寧に体を拭き、納棺師に引き渡した。このとき、警察官の仕事の重さと奥深さを感じたという。

■「地元の治安を守る」

子供のころに警察車両の展示会で「かっこいい」と思って以来、ずっと警察官に憧れ続けた竹谷さん。地元の大学を出て、一度は神奈川県警の試験に合格したものの、「どうしても地元の治安を守りたい」と宮城県警の試験を受け続けたという。

3月末、警察学校を卒業。岩沼署地域課増田交番に配属された。岩沼署は今回の震災で計6人が殉職するほど被害が大きい地域だ。朝7時に出勤し、明るいうちは不明者の搜索、夜はパトロール、翌日昼過ぎに寮に帰って寝て、また翌朝7時に出勤という過酷な毎日が続く。

休日はこれまで1日もなく、体力は限界を超えている。それでも、「住民の方から『ごころうさま』『ありがとう』といわれると力がわいてくる」。いつ街が元の姿に戻るのか、想像もつかないが、「とにかくやるしかない。一人でも多くの不明者を見つけたい」とがれきに立ち向かっている。(楠秀司、中村昌史)

派遣自衛隊員 PTSD調査へ

NHKニュース 2011年4月26日 6時53分

防衛省は、東日本大震災の被災地に派遣され、遺体の収容などに当たった自衛隊員について、活動終了後に強い不安感などで日常生活に支障を来すPTSD＝心的外傷後ストレス障害などの症状が出るおそれがあるとして、定期的に調査を行い、健康状態を観察することになりました。

今回の震災で自衛隊は、災害派遣では過去最大のおよそ10万人を投入し、被災地での活動に当たっていますが、防衛省によりますと、遺体の収容や搬送などの活動が続くなかで、悩みやストレスを抱え、精神的な不調を訴える隊員も見られるということです。このため、防衛省は、被災地での任務を終えた隊員が悲惨な場面を思い出すなど強い不安感に襲われ、日常生活に支障を来すPTSD＝心的外傷後ストレス障害や、「うつ」の症状が出るおそれがあるとして、定期的に調査を行うことになりました。調査は、派遣された陸上自衛隊員全員が対象となり、「体験した場面を思い出すと息苦しくなるか」といったアンケートに答える形式で、活動を終えてから、1か月後、半年後、1年後に行い、健康状態を観察します。そして、症状が見られる隊員に対しては、所属する部隊の指揮官が面談をするほか、必要に応じて臨床心理士によるカウンセリングや精神科医による診察を行うことにしています。

「PTSDの治療拠点が必要」被災地支援の医師ら報告会

朝日新聞 2011年4月17日
被災地での医療支援活動について報告する医師＝大阪市中央区

東日本大震災の被災地支援に参加した府や府立病院機構の医師、看護師、保健師らが15日、大阪市中央区の大阪赤十字会館で報告会を開いた。被災地に派遣される可能性がある府や市町村の職員ら約200人が参加し、「病院、医療スタッフの負担は日々増えている」などの体験談に耳を傾けた。

府がこれまで岩手・福島両県に派遣した医療関係者は、医療救護支援（52人）▽公衆衛生（68人）▽診療放射線技師（40人）▽こころのケア（40人）の各チーム計200人。

府立病院機構の医師毛利智好さんは3月末の5日間、岩手県大槌町の避難所で患者を診察し、救急車で地域を巡回した。避難所の小学校のトイレは雨水をためて流すなど、衛生状態が懸念される状態が続いていることや、民家の一部を仮診療所になっている現状を説明。「薬や物資は行き渡りつつあるが、地域の拠点病院や診療所などの箱ものが壊滅し、機能低下が続いている」と説明した。

一方、診療放射線技師チームは福島県南相馬市などで、福島第一原発の半径20キロ圏内から避難してきた住民のスクリーニング（表面汚染の測定）作業に従事した。府健康づくり課の放射線技師小田晃之さんは「当初は、隣接県の避難所で『福島からの避難者は放射能に汚染されている』と立ち入りを拒否されたため測定に出向くなど、住民の風評被害を取り除く活動が中心だった」と報告した。

被災者の心のケアの問題も深刻な課題だ。府立精神医療センターの医師野田哲朗さんは「カウンセリングは共感が基本といわれるが、今回の災害はあまりに大きく共感が難しい。ひたすら傾聴することが大切」。今後は心的外傷後ストレス障害（PTSD）の治療が長期にわたることが考えられるため、拠点となる施設を設け、一般の医療と連携しながら電話相談や巡回訪問を続ける必要がある、と指摘した。（山崎崇）



支援情報Q&Aより 被災者への接し方

読売新聞 2011年4月15日

◆ペース合わせて

Q 被災地から近所に引っ越してきた人がいます。どう接したらいいのでしょうか？

A 広島県福山市からの派遣で、宮城県気仙沼市の避難所で支援にあたった保健師の吉岡邦子さんに尋ねると、「変に気を使わず、何が必要か、どんなことで困っているのか、必要としているものは何かを尋ねてみて」ということでした。

住む場所が変わると、風土や方言、ごみの出し方まで勝手が違います。そうした声かけが孤立を防ぎ、住みやすい環境を整える第一歩になるのです。

また、被災当時のことを話すことで記憶がよみがえり、心的外傷後ストレス障害（PTSD）の症状が出る人がいますから、無理に聞き出さない配慮が必要だといえます。

広島県立総合精神保健福祉センターの中津完所長は、「本人が自分から話す時にはしっかり耳を傾けて受け止め、普段はお互いコミュニケーションをよく取って、避難者のペースに合わせて支援を続けることが大切です」と助言しています。

たまには太陽の子・手をつなぐ、たまにはつなぐちゃんベクトル、たまにブログたまにはチェック



大阪市天王寺区生玉前町 5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行